保育　実践事例１

遊びを通して自分で考え，伝え合う力を育む保育の展開

－ 年長５歳児　土・泥・水にかかわる遊びから －

１　保育の構想

⑴ 子どものとらえについて

本学級の子どもたちは，年少の時から園庭の環境に喜んでかかわり，いろいろな遊びを経験してきた。特に，体を動かす遊びを好み，園庭での木登りや竹登りに加え，遊戯室でも巧技台や跳び箱等を使って遊ぶ姿が多く見られた。さらに，年長や他クラスの友だちの遊びに触発され，新しい遊びに興味をもち，遊びに入れてもらったり，やり方がわかると自分たちでもその遊びに取り組んだりするなど，様々な遊びを生活の中に取り入れていった。そして，その中で，自分なりのやり方を見つけながら，「できるようになりたい！」というめあてに向かって，繰り返し取り組み，体を動かす心地よさを経験してきた。

進級してからは，土・泥・水の感触を楽しみながら砂場で遊んだり水浴びをしたりすることに興味をもち，その中で，自分の思いをもって使う道具を選んで，遊びの中で使うようになった。しかし，いろいろな遊びを試してみることは多いが，一つのことに集中し，継続して自分の願いを実現しようと試行錯誤する姿はまだ見られなかった。

また，「学級で共有する活動」の中の伝え合いの場では，自分の楽しかったことやうれしかったことを伝えることはできるが，友だちの思いや考えを聞いて受け止める姿勢はまだ十分に育っていないように感じていた。その中で，経験してほしい遊びについて取り上げてもそのことに興味をもちにくく，ただ黙って聞いているだけの子もおり，伝え合うことに気持ちを向けることができない様子が多く見られた。

そこで，興味のある土・泥・水にかかわる遊びの中で楽しさを味わい，その楽しさを伝え合いの場を設けて友だちに伝えていくことで，この遊びがクラス全体に広がっていくことを願った。また，遊びが広がっていくことで友だちと試行錯誤しながら遊ぶ楽しさも味わっていくことができればと考えた。

⑵ 本活動のねらいや内容と保育で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

保育では，遊びの中で「どうやったらいいの？」「こうしたらいいんだ！」などと，子どもたちなりに友だちとともに試したり工夫したりする姿そのものが，思考し，判断し，表現する姿につながっていくのではないかと考える。

そこで，この活動では，土・泥・水の性質に気づいたり生かしたりしながら，自分の願いを実現するために遊びに向かってほしいと願っている。そのために，教師は２つのねらいをもちながら，以下のような姿を育成していきたいと考えた。

≪ねらい≫
- 自分の考えやめあてをもって，友だちと一緒に相談したり協力したりしながら遊ぶ。
- 水と泥の感触を十分に味わいながら，心を開放しダイナミックに遊ぶ。

≪期待する姿≫
- 繰り返し試したり工夫したりする姿。
- 遊びの中で感じたことを表現していく姿。
- 感じたことや考えや考えたことを出し合いながら問題を解決する姿。

また，子どもがより主体的に動くために５歳児前半では，子どもたちが自分なりの発見や気づきを教師や友だちに伝えようとすること，どんな思いをもっているのかを教師が引き出していき，関心をもって受け止めていくことが，子どもがより主体的に動くことにつながっていく。そして，５歳児後半では，楽しいことだけではなく，困難に立ち向かったり，困り感を友だちと共有したりする場面に出会わせ，子どもなりに問題を解決していこうと考えたり友だちと協力して考えたりするようにさせ，11年間を見通しながら，「思考力・判断力・表現力」の育ちにつなげていきたい。

(3) 11年間を見通した思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

「自分でみつけた遊び」の後に，クラスみんなで友だちの遊びを聞いたり分かり合ったりする伝え合いの場を設定し，自分の思いや考えを表現し，伝えることを大切にしていく。また，「自分で見つけた遊び」の中でも，気づいたことや感じたことを伝え合う時間を設定していき，友だちの思いに気づいたり受け止めたりする経験を積み重ねていくことで，興味・関心を広げたり膨らませたりすることができると考える。そのための伝え合いの場の構成を次のように構想した。

「思考力・判断力・表現力」の育成に関する学び合いの場面の構想

○・・・予想される子どもの姿　□・・・教師のはたらきかけ

学級で共有する活動（伝え合いの場）

自分でみつけた遊び

≪5歳児前半≫
～ビッグニュースを友だちに知らせよう～
・自分がして楽しかったことを知らせる。
・困ったことや疑問に思ったことを友だちに聞いてもらう。
・友だちの話を聞いて，興味をもとうとする。

○子どもの「楽しかった！」という思いを認め，どこが楽しかったのかを教師が言葉で伝えていく。
○伝えたくてもなかなか言葉が出にくい子どもには，気持ちを引き出しながら教師が思いを代弁していく。
○必要に応じて，作ったものや遊びで使ったものを実際に見せることで，「わたしも（ぼくもやってみたいな）」と感じるようなきっかけを作っていく。

≪5歳児後半≫
～ビッグニュースをみんなで伝え合おう～
・友だちに何が楽しかったのかを詳しく話す。
・困ったこと疑問に思ったことを知らせ，どうしたらよいか考えを聞く。
・友だちの話を受け止め，楽しさに共感したり，考えたりする。
・友だちと共通の願いをもち，共に解決しようとする。

○それぞれに楽しかったことやうれしかったことを明確にするために，具体的にどこがすごいと感じたのかを教師が伝えながら，一人ひとりの思いを認めていく。
○困ったことなどがあれば，「○○ちゃんが困っているけど，何かいい考えないかなぁ？」と問いかけ，クラス全体で考えることができるように伝え合う場を設ける。
○伝え合いの場では，子どもたち自身が自分の考えを確かにもつことができるように，「どこで困った？」「どんな気持ちだった？」などと，遊びを振り返ることができるように，気持ちを引き出していく言葉をかける。

教師のはたらきかけとして，感じたことや考えたことを言葉で伝え合ったり，友だちに伝えようとしたりする場を教師が保障していくことで，子どもならではの表現を認めたり広めたりしながら，幼児期なりの学び合いを大切にしていきたい。そして，子どもたちが出し合った考えを教師がつないでいくことで，より一層，遊びへのイメージが広がり，次の遊びへの意欲をもつきっかけとなると考える。また，子ども自身が自分の遊びを振り返ることができるように，「どうやったらできたの？」「なんでそう感じたの？」などと，問いかけることで，考えを深めるきっかけをつくっていきたい。この経験が，小学校での自ら問題をみつけ，解決したり追求したりする力につながっていくことを願っている。

○・・・予想される子どもの姿　□・・・教師のはたらきかけ

期待する姿

○身近な環境にかかわって考えたり試したりする中で，その性質に気づき，生かして遊ぼうとする。
○いろいろな活動に，自分の考えをもって取り組んでいく。
○友だちの中で，自分の考えを出しながら選ぶ。
○数人の友だちと仲間意識をもち，めあてを共有して遊ぼうとする。

自分でみつけた遊び
～土・泥・水と仲良しになろう～

～土，泥，水の感触を楽しむ～
・土，泥，水に親しみをもち，かかわる中でその素材がもつおもしろさや不思議さを実感し，遊びに生かしていこうとする。
・泥遊びを通して，感触を楽しみながら工夫して作ることを楽しむ。
・途中で困ったことがあったら，友だちに相談したり教師に尋ねたりして，問題を解決していこうとする。

○教師も子どもと同じように裸足になったり汚れることを楽しんだりすることで，子どもと感触や楽しさを共感していきながら，感じたことを言葉で伝えていく。
○子どもの気づきや発見を大切に受け止めていき，一緒に問題について考えたり，解決のヒントを出したりしながら子どもたちで解決できるように支援をしていく。

～土，泥，水を利用して遊ぶ～
・全身を使って遊ぶどろんこ遊びや水遊びを通して，体を動かす楽しさを感じる。
・「築山を思いきり滑りたい」という願いをもちながら，滑るにはどうすればよいのかを，友だちと一緒に相談しながら，いろいろなやり方を試していく。
・滑るために築山を掘ったり，土を塗ったりするために必要な道具を自分で選択していく。

○新しいことや少し難しいことにも挑戦しようという気持ちをもって，いろいろな活動に取り組む。
○学級の仲間意識を深めていく。
○友だちの様々な個性やよさに気づき，認め合う。
○人に対してしたり言ったりしてはいけないことがあることを理解し，相手の気持ちや立場を考えて，自分で判断し行動しようとする。

○滑るために，子どもたちなりに工夫している姿を認めながら，滑れるようにはどうしたらいいかを一緒に考えながら，子どもたち自身が滑れるためのヒントに気づけるような言葉をかけていく。
○子どもの思いや経験を引き出していく言葉を教師が意図的に投げかけていくことで，経験が学びにつながるような支援をしていく。

3　保育の実際

進級して新しい環境に慣れてきた５月末頃から，本学級の子どもたちは大好きな園庭にかかわる遊びを楽しむようになってきた。その中で，子どもたちは広い砂場を生かして思いきり遊びたいという願いをもちながら，まさ土山にかかわり始めた。子どもたちはまさ土山を“ダム”や“温泉”とイメージし，掘ったり水をかけたりしながら遊びを進めていた。そこで，教師は遊びが広がっていくように願い，子どものイメージに合うであろうと考えたトイやバケツなどを用意したり，遊びやすくなるように砂場を耕したり，大きなスコップを用意したりして，環境の構成を行った。

(1) トロトロ　ねちゃねちゃ　チョコレートできたよ！～少人数での伝え合い～

初めは，数人がまさ土山で遊んでいたが，伝え合いの場でこの活動を取り上げたことから，次第に10人くらいがここで遊ぶようになった。子どもたちは同じ場で遊んでいるのだが，イメージはそれぞれ異なっているようだったが，それぞれに，水や泥にかかわりながら継続的に遊びに取り組む姿が見られていた。

この日は，園児Ｂが水をたくさん流してしまい，泥がべちゃべちゃしたことから，一部の子どもたちのイメージはチョコレート工場に変化していった。その中で，子どもたちが積極的にイメージを伝え合おうとする姿が見られていた。

≪自分でみつけた遊び≫　６月９日の子どもの姿
園児Ａ「ここ，トロトロー。」
園児Ｂ「あっほんとだ。トロトロ！」
園児Ａ「チョコレートみたい。」
Ｔ　　「ほんとだーチョコレートがとけたみたいだね。」
園児Ｂ「きもちいいね。」　Ｔ「気持ちいいね。」
園児Ｃ「ここはねちゃねちゃしちょる。そことはちがうね。」
Ｔ　　「違うって何が違うの？」
園児Ｂ「ねちゃねちゃのところはやわらかくてあったかいよ。」
園児Ｂ「なんでこっち（トロトロ）とこっち（ねちゃねちゃ）はちがうのかなぁ。」
園児Ａ「水いっぱいいれたけんねちゃねちゃになったんだわ。」
園児Ｃ「じゃあ，もっと水入れたらねちゃねちゃになるかなぁ。」
園児Ｂ「なるかもしれんよ。」「もっと入れてチョコレートだ。」

「トロトロになったよ！」

泥の感触を楽しみながら，子どもたちなりに場所によって泥の質の違いがあることに気づき，その違いについて友だちと一緒に考えていった。その結果，泥に入れた水の量の違いに気づき，実際に水を加えながら，トロトロの感触を実現していった。その際，教師は子どもの気づきや考えに共感したり，子どもの考えを引き出したりする言葉かけを行った。

このように，子どもの気づきが生まれていった理由として，次のようなことが考えられる。

○自分で感じたことを表し，友だちが共感してくれたことで安心し，自分の考えに自信をもつことができた。

○教師が意図的に「何が違うの？」と園児Ｃの考えを引き出す言葉をかけたことで，質の違いについて気づくことができた。

以上のように，近くで遊んでいる子どもたちがどんな泥ができたのかを伝え合い，さらに教師が子どもの考えを引き出そうとする言葉かけによって，それぞれの泥の違いやそうなる理由に気づき，新しいやり方を見つけていくことができた。

(2) 泥だんごはどうしたらできるんだろう～一人の課題から教え合いへ～

前述したように，「もっとチョコレートをつくりたい」という願いをもち，土・泥・水の遊びにかかわっていく中で，子どもたちは泥んこの気持ちよさを実感していった。

そして，６月初め頃から泥だんご作りが盛んになり，子どもたちなりに固さにこだわったり丸くしたりすることを目指して取り組んでいた。泥だんごあそびを通して，多様な体験を積み重ねていくことで，遊びを追求していこうとする姿勢が見られるようになってきた。

≪自分でみつけた遊び≫　６月29日の子どもの姿
園児Ｄ「できん！だんごできん！」
Ｔ　　「何で出来んのだろう。どこで困ってるの？」
園児Ｄ「なんかいもなんかいもつくるけど，すぐこわれるもん。」
Ｔ　　「ほんとだね。どうして壊れちゃうんだろうね」
園児Ｄ「Ｅちゃんといっしょなのに，Ｅちゃんのこわれんし。」
Ｔ　　「そうだね。Ｅちゃんと一緒のところで作ってるのにね。」「何が違うんだろう。」
園児Ｄ「こないだはできたんだわ。まるいやつつくったもん。ねーＥちゃん。」
Ｔ　　「こないだ出来たときはどうやって作ったの？覚えてる？」
園児Ｄ「こうやって・・こうやって。」（作って見せてみる。園児Ｅも一緒に見ている）
園児Ｄ「あっ！こないだより，みずがすくないかも。Ｄちゃんのは？」
園児Ｅ「みずいれて，もっとぎゅっぎゅっせんとできんよ。こうやって・・・」
Ｔ　　「Ｄちゃんの考えとＥちゃんの考えが合わさったらできるかな？」
園児Ｄ「（やってみる）・・・このやり方だわ！」

園児Ｄは一回できた泥だんごができなくなったことにとても戸惑いを感じていた。しかし，教師が過去の経験を引き出すきっかけとなる言葉をかけたことで，園児Ｄは次第に感覚を取り戻し，自分なりにやり方を試していった。また，友だちのやり方を見ながら，「こうするといいかも！」と，友だちの考えを取り入れ，工夫することをみつけることもできた。この姿から，子どもの思いを引き出したり，子ども同士の考えを教師が関係づけたりしていくことで，子どもなりに考え，自ら新しいやり方を発見していくことができると感じた。

「このつちがいいんだよ！」

この日，伝え合いの場で園児Ｄの姿を取り上げたところ，子どもたちから泥だんご作りでの困っていることやわからないことなどがたくさん出された。その思いを，泥だんごをよく作っている子どもたちが受け止め，「じゃあ，作り方を教えてあげるけん，やりたい人は集まって」と，泥だんご作りを教えてあげようとする姿が見られた。困っている子も自分の思いを素直に表現していくことで，周りの子どもたちがその思いを受け止めたり関心をもったりして，遊びが広がり，深まっていったのだと思う。その後も，泥だんご作りのやり方を教え合ったり新たな作り方を見つけたりする姿が継続して見られた。

「いまからおだんごつくるよー！」

(3) 築山をすべりたい！～一人の願いから生まれた新しい工夫～

本学級の子どもたちの願いとして，６月より「築山を滑ってみたい！」という思いがあった。しかし，段ボールやビニールを使ってもなかなか滑ることができず，子どもたちもあきらめかけていた。そこで，教師は滑れるようになるための一つのヒントとして泥遊びに関する絵本を園庭に置いておいた。その中に，「どろんこすべり台」の写真が載っているのをみつけた子どもたちは，それを参考にしながら，再び「滑りたい！」という願いをもち，それを参考にしながら遊びに取り組み始めた。

この記録は，なかなか築山で思うように滑れず，困っていたことを園児Ｆが伝え合いの場で発表したことから，子ども同士が考えや思いを出し合った場面である。

≪学級で共有する活動≫　７月13日の伝え合いの場での子どもの姿
園児Ｆ「どうやってもここですべれんのだわ。みんなたすけてよ。」
園児Ｇ「だって，ここんとこ，くさがあるけんでしょ。みちょったもん。」

園児H「でも，まえ，ほしぐみのAちゃんがダンボールですべっちょったよ。」
T　「前滑れてたのに，なんで滑れないんだろうね。Fちゃんも前，段ボールで滑っていたけど，どうやって滑れたんだろうね。」（教師はホワイトボードに築山の絵を書く。）
園児F「あのね，ぺったんこのとこをすべってね，つるつるしたとこにおしりつけたらすべれたよ。」
T　「ぺったんこのところってどこ？どうやって滑ったらいいの？」
園児H「くさのよこんところすこしすべってたよ。Fちゃん，よごれちょったもん。」
園児I「そこにみずをながしたらいいじゃん。あのちいさいとこのやまにみずかけたらすべったよ。」
園児J「あの，つくったチョコレートのつちつかったらすべれるかもしれんよ。」
T　「なんで，チョコレートのだったら滑れると思ったの？」
園児J「だってねちゃねちゃのやつはやわらかいけん，つきやまとちがうもん。」
T　「築山の土とチョコレート工場の土，何が違うんだろう・・・」
園児G「みずがすくないもん。もっともっとみずがないとすべらんよ。だってHちゃん，ねちょねちょのとこですべってたもん。」
園児F「じゃあ，チョコレートとみずがあればすべれるってことだわ。」
T　「築山を滑るためにはチョコレートをペタペタつけて，水をかけたらいいってことなんだね。これで滑られるかなぁ・・・」
園児H「やってみんといけんわ。やってみんとわからんし。」

このように，子どもたちは過去の経験の中で見つけたことを生かして，自分たちの問題を解決しようとしていた。また，園児Hや園児Gのように，これまで友だちがしていた築山すべりの様子から見つけていたことを友だちのために表現し，自分のことのように考えようとすることもできた。その考えと他の考えとを教師がつないでいく言葉を投げかけていくことで，話し合いが深まり，問題を解決するきっかけを見つけ出すことができた。特に園児Gは，自分の考えを友だちが遊びに取り入れてくれたことで，この話し合いの次の日には自ら築山すべり台に取り組み，どのようにしたら滑るのかを考えながら，楽しく滑る姿が見られた。

「すべるの，たのしいな！」

4　成果と課題

今回の実践において，子どもたちは遊びの中でそれぞれにめあてをもち，追求していく経験を積み重ねていくことができた。その過程においては子どもたちの遊びの様子や思いをとらえて，遊びの中でも伝え合う場をもち，子ども自身に気づかせていくことも大切であった。また，教師が，それでよしとするのではなく，楽しかったことを発表したり困ったことを伝え合ったりする場を学級全体で意図的に設けていくことで，子どもたちは友だちの思いを知ったり，自分の経験とをつなげて考えたりしながら，改めて，自分の思いを伝えることができた。このことは，教師が願っている遊びを広げるということにとどまらず，新しい願いやさらなる追求を生み出すことにもつながっていった。

今回の実践では，少人数での学びが学級の他の子どもたちの学びにつながったり，より深まったりすることができたと考える。しかし，興味のある子は伝え合う場で積極的に話したり聞いたりして，自分の考えを作ったり思いを膨らませたりすることができたが，中には興味がなく，ただ黙って聞いているだけの子もいた。今後は，一人ひとりの発達や興味・関心の違いに応じて，どのような場の設定やはたらきかけをすればよいのか，子どもの遊びの姿を的確にとらえながら，伝え合いの場の構成について，さらに研究を進めていきたい。

（文責　名越　絵美）